

学習マンガにおける表現形式の違いが内容の理解と読みの速度に及ぼす効果

2J05F018-5 菅谷 充

(指導教員) 向後千春
(教育コーチ) 中井あづみ

1. 背景

今日、雑誌も単行本も売れず低迷するマンガ市場の中で、ひとり気を吐いているのが「大人の学習マンガ」である。1988年の「マンガ日本経済入門」ブーム以来、大人向けの学習マンガは種類、量ともに増えつづけているが、本当に学習の効果はあるものなのか。もしあるのなら、どのような表現方法をとれば、より学習効果が高くなるのであろうか。学習マンガの実作者としても強い関心を覚えたのが本研究の動機となった。

2. 目的

まず曖昧であった学習マンガのジャンルと使われている表現形式を調べ(研究1) そのうえで学習マンガの表現形式の違いが、読者の理解度と読みの速度に与える影響を検証した(研究2)。

3. 研究1

3.1 方法

図書館蔵書検索データベース OPAC や書店の在庫検索システムで確認できた 1619 点の学習マンガのうち、書店や古書店、図書館で目視可能な 576 点に目を通し、ジャンルと表現形式を調査した。

3.2 結果

ジャンルは、576 点中 115 点を占めた歴史を筆頭に、社会(伝記) ビジネスなど 42 種類に分類できた。表現形式は、ストーリー型、教授型、導入型(マンガは最初だけ)、イラスト型(イラストが大半)、文章+イラスト型(文章主体でマンガは添え物)の5種類となった。

3.3 考察

状況や概況が伝わるだけでかまわない歴史・伝記マンガはストーリー型が、資格試験などの知識伝達マンガは教授型が多いことがわかった。そこで本当に歴史や伝記にはストーリー型が、資格試験などには教授型が向いているかを、所要時間とともに検証することにした。

4 研究2

4.1 方法

知識伝達型の「ハム問題集」と伝記型の「アップル II ストーリー」という2本のマンガを用意し、それぞれ教授型とストーリー型に描き分けたくうえて Web サイトに掲載した。乱数で振り分けられた実験協力者には、教授型だけ、またはストーリー型だ

けで描かれた2本のマンガをオンラインで読んでもらい、直後に理解度テストとアンケートに回答してもらう方法を採用した。

4.2 結果

教授型群 45 名、ストーリー型群 59 名の理解度テストを分析した結果、「ハム問題集」「アップル II ストーリー」とともに、教授型群の方が平均得点が高く、5%水準の有意差も認められた(Fig.1)。

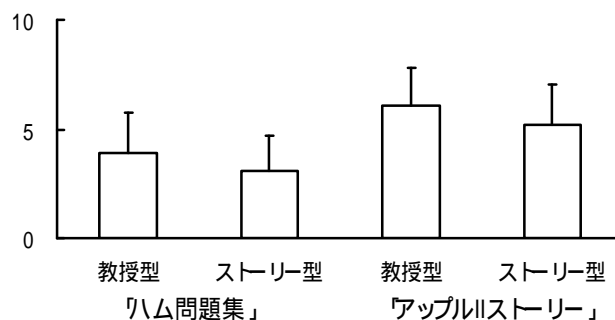


Fig.1 両作品の理解度テスト平均得点(10点満点)

読みの速度は2作品ともストーリー型群の方が速かったが、5%水準の有意差が確認されたのは「アップル II ストーリー」のみであった。また、時間をかけて読んだ人ほど高得点を出す相関関係が認められた。さらにアンケートの結果からは、ストーリー型の方が親しみを感じてもらえることが判明した。

4.3 考察

ストーリー型群が高得点を出すものと期待された伝記型の学習マンガでも、教授型群の方が高得点を出す結果となった。詳しく検証したところ、表現形式そのものよりも、学習マンガで扱われている題材そのものに対する興味の有無で、成績も大きく変化することが判明した。また、伝えるべき情報が未知か既知かで表現方法を変えることが、効果的であることも示唆された。

5 結論

本研究の結果、理想の学習マンガを求めるのであれば、導入部はストーリー型にして読者の興味を惹きつけ、学習部は教授型で時間をかけて読ませるなど、読み方に緩急が出るハイブリッド型の表現形式が適していることが示唆された。また、「視線誘導」の問題など、次の研究への課題も発見することができた。